

信頼と危険の詩学

——ル・グイン、魔術、カニバリズム——

本 橋 哲 也

〔神話とは何でしょうか？〕——もしあなたがアメリカ大陸先住民の誰かに尋ねたとしましょう。そうすると彼はきっこう答えるでしょう。それは人間と動物がまだ区別されていなかった頃の物語である、とね。この神話の定義は、私には、なかなか興味深いものに思えます。

(クロード・レヴィ＝ストロース、ディディエ・エリボン『遠近の回想』竹内信夫訳、みすず書房、1991年、248頁)

レヴィ＝ストロースは食人を、他者との同一化という背景——社会生活の一般的条件とでもいうべき背景——の上に描かれた不安定な像として理解している。食人は、社交性の勾配の極点に位置するであろうものであり、反対の極にあるのは無関心あるいはコミュニケーションの不可能性であろう。〔食人が表現しているのは、社交性の完全な欠如ではなく、その過剰なのである。〕

(ヴィヴェイロス・デ・カストロ『インディオの気まぐれな魂』近藤宏・里見龍樹訳、水声社、134頁)

食べる前には、会話がなければならなかった——そしてこれら二つの行為が、時間性を解き開いていたのである。そのような時間性は、敵との相互包含と相互前提という関係のなかから現れるものだった。復讐の複合は、原初的な全体性を回復する装置、すなわち生成を否定する装置であるどころか、この言葉による闘争を通じて時間を生み出していたのである。その儀礼は大いなる〈現在〉をなしていた。(同上、95頁)

記録者と宣教師たちは、トゥピナンバの日常生活を、愛想のよさや寛大さ、礼儀正しさに顕著に特徴付けられたものとして描いている。…彼らにおける敵への憎悪や、捕虜、儀礼的処刑、食人からなる複合の全体は、敵の人間性の全面的な承認に立脚していたのである——もちろん、このことは何らのヒューマニズムとも無関係だが。(同上、110頁)

アボリジニの人々にとって、かれらが語るのが歴史であるか神話であるかは、まったく問題とならない。なぜなら、ドリーミングの歴史もキャプテン・クックの歴史も、どちらも「本当にあった」できごとだからである。だから、アボリジニの人々にとって重要なのは、その歴史物語が神話なのか、歴史なのかではなく、むしろ、それが倫理的な歴史なのか、それとも不道德な歴史（植民地化の歴史）なのかの区別はずだ。（保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』岩波現代文庫、2018年、124頁）

カニバリズムはたんなる野蛮な食人行為ではない、それ以上のなにものか、である。しかも、いたく関心をそそられることは、どうやら食べる主体はほぼ例外なしに女性なのである。女たちはみな、死者のからだの一部を加工＝料理したうえで食べたり、嘗めることによって身体の内に入りこみ、その結果として身籠もり、この世に新たないのちをもたらすのである。死と再生をめぐるテーマの変奏であった。そして、これら稀釈されたかたちでのカニバリズムの情景からは、殺害した敵の身体を食べることとは異なった、再生を促す同族的なカニバリズムの匂いがする。ここでも食と性とが、食べることと交わることで、奇妙に交錯し、置き換えられている気配が感じられる。いや、端的に食べることはそのままにセックスであったのだ。すくなくともセックスの代替行為ではあった。女はそうして妊娠し、たいていは息子を産み落とすのだから。（赤坂憲雄『性食考』岩波書店、2017年、253頁）

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。（日本国憲法前文）

0. はじめに

文学に関心を寄せる我々にとって、二〇一八年は悲しいことに、石牟礼道子とアーシュラ・ル＝グウィンという二人の卓越した物語作家を喪ったことで記憶されることだろう。ともすれば、一方は「聞き書き」や「ドキュメント」として、他方は「SF」や「ファンタジー」として、手垢のついたジャンルに押し込められてきたきらいがあるが、彼女たちの作品に虚心に向き合えば、そこには普遍的な物語文学の頂点があることがわかる。石牟礼については、保莉実が言う意味での「倫理的な歴史」であるという点のみを確認しておき、それを一つの思索の入り口として、そのような倫理の頂点にある人間関係における危険と信頼が

ル＝グウィンの神話的歴史においてどのように発現するのか、について考えていくことが本稿の目的となる。その際に参照したいのは、最近の哲学思潮である「思弁的実在論」との関わりで注目されている新しい人類学の知見、とくにそのカニバリズムへの洞察である。

1. カニバリズム言説の歴史

ヨーロッパにおける食人言説の歴史はおおよそ四期に分類できる。第一期は古代ギリシャから中世まで、ヘロドトスやマンデヴィル、マルコ＝ポーロといった作家が有名だが、食人が理解不能な他者の習慣として描かれており、そのような怪物的存在は自己の共同体の外部を示すために必要なだけで、実在を証明する必要はなかった。食人を示す用語も「人を食べる人」を意味するアンソロポファジーで、自己と他者との関係の変容とは無縁であった。

それが第二期の西洋植民地主義の時代になると、コロンブスがたまたま耳にした「カニバレス」という音から「食人」が実体化されたように、記号による被植民者の悪魔化の手段として伝播していく。この傾向はアメリカ新大陸から太平洋の島々、オーストラリア、東南アジア、アフリカにまで植民地支配とともに拡充してゆき、モンテーニュやスウィフト、サドといった稀有な文化相対主義者もいたが、コロニアルな言説の権力的布置が自己を正当化し、他者を周縁化するヘゲモニックで一方的なベクトルのもとに、植民地支配が免罪される契機が作られていった。この時期の特徴は、言説による実体の周縁化にあって、植民地主義者たちは自らの暴力的支配を正当化するためにカニバリズム言説を多用した。しかし同時に、まだ伝聞でしか知らないけれども、宣教師とか航海者と貿易商人といった仲介者を通じて接触した境界線上の他者に対する魅力と恐れが入り混じった表象や幻想としての文学的可能性をも、カニバリズム言説は孕んでもいた。ヨーロッパの植民地主義勢力が支配を世界に拡大していく中で、ほぼ同様のモデルにしたがってカニバリズム言説も波及していくが、その歴史的経緯を辿っていくと、ある特定の自己と他者の遭遇の初期にだけ、港町や山間の村といったコンタクトゾーンにおいて、カニバリズム言説が噴出し、それが商業関係にしる植民地支配にしる、自他の関係が安定すると、消滅していく傾向がどこでも見られる。つまりカニバリズム言説は、実体不明の他者に対する魅惑と恐怖と忌避と差別を含んだ記号的操作の産物であって、コンタクトゾーンにおける自他の関係の微妙なバランスと力学において増殖する、特異な表象体系だったと言える。

第三期は二〇世紀のポストコロニアル時代における人類学の修正主義的な知の積み重ねによって、以前のヨーロッパ中心主義的なカニバリズム言説の歪みが検証され訂正されていく。アレンズやオベイセーカラといった学者たちの研究によって、先住民による食人慣行に疑問が投げつけられた。たしかにここでベクトルの方向は、コロニアリズムの時代とは逆で、ヨーロッパ中心主義が暴かれていくことになったが、自己と他者、ヨーロッパと非ヨーロッパ

という関係そのものは温存されていた。ここでの関心からすると、このポストコロニアルな読み直しは確かに重要な修正をもたらしたのだが、食人儀礼が存在しなければ先住民は善良で植民者が悪い、という想定に拘泥するあまり、コンタクトゾーンにおける自己と他者の相互変容というモーメントを無視したきらいがある。植民地主義への自己反省に基づくポストコロニアルなカニバリズム言説の見直しは、食人という営みの表象的重要性、記号としての文化的意義に他者の自律性を感得することをせず、結局のところ、カニバリズム言説におけるヨーロッパの優位性というヘゲモニーを温存したのである。

それが第四期になると、表象の重要性に焦点が当てられ、幻影によって生み出される自己と他者関係の変容が焦点となる。人間と動物とを区別せず、あらゆるモノ自体の自律性に注目するという、先住民の思考の根幹に着目しながら、ヨーロッパ人の残した食人儀礼の記録が読み直されていく。これは最近の人類学における「存在論的転回」と呼ばれる学問動向と関わる。たとえばヴィヴェイロス・デ・カストロは自らの学問的態度を「多自然主義」と呼ぶが、それは人間中心の世界観を超越した地平で、複雑な自然世界を構想し、そのなかで人間自体の自然性を考える必要性を訴える。このような現代の人類学は「新しい唯物論」や「思弁的実在論」といった現代哲学の新潮流とも関わって、一九世紀に成立した帝国主義的な人類学とも、ポストコロニアリズムによる表象の力学批判を踏まえた再帰的な人類学とも異なり、そうした学問の中核にあった人間の特権性を見直して、モノ自体をエージェントと捉える態度に基づいている。動植物や精霊や無生物を人間と同格の存在と見なすアニミズムや多自然主義によれば、人間にとって敵対関係にある危険な存在は人間社会と両立困難な形で対立しており、それゆえ自然は「一」ではなく「多」であるとされる。デ・カストロが論じるカニバリズムは、自然の身体でありながらも同時に文化の一部である人格を持っている肉を食するという行為において、自然と文化の境界線に位置するものである。食人は「敵」という根源的な他者に対する復讐であると同時に信頼であり、人間だけでなく動物や死者、モノにまでいたる多元的な世界における非ヨーロッパ的で双方向的な「アンチ・ナルシス」の思考を導き出すとされる。本稿では、こうした絶対的な相互性にもとづく食人行為の理解を鍵として、ル＝グウィンが描く魔術世界の意義を考えていきたい。

食べることは、交わることと殺すことと並んで、最も人間的で双方向的な行為だが、ル＝グウィンの小説では、食べることによる信頼の創造が、様々に変奏されて描かれており、そうした場面をいくつか取り上げながら、食と性、神話と歴史、自己と他者、生命と死、信頼と危険といった相互依存概念を考察するのは魅力的な作業である。今日はその最初の段階として、ル＝グウィンの小説群のなかでも、カニバリズムがもっとも直截に描かれている『アースシー物語』の第二巻『アチュアンの墓』を読解しながら、「存在論的転回」以降の新しい人類学が注目するカニバリズムの相互性に光を当ててみたい。とくにここで注目したいのは、ヴィヴェイロス・デ・カストロが言う意味での、食人行為における他者への配慮、カニ

バリズム言説の絶対的な互酬性，すなわち言語的対決が自己と他者とのアイデンティティの認知を通して信頼関係の醸成にまで至るプロセスである。

2. 食人によるアイデンティティの消滅

『アチュアンの墓』は、アースシー世界の東方にあるカルガド帝国が舞台で、それはカレゴ・アト、ハー・アト・ハー、アトニニ、アチュアンという四つの島からできている。まず多島海という、相互性や交通領域を考える上で重要な舞台に注意しておきたい。アチュアンの村に生まれた少女テナーは、太古の神々をまつる墓所の大巫女に選ばれたその日から、故郷も家族も財産も名前さえも失うことを運命付けられていた。五歳になると家庭から切り離されて神殿での儀式に臨まされ、その日から「食べられた者」を意味する「アルハ」という名のみで呼ばれるようになる。アルハはしだいに母の記憶さえ失い、アチュアンの墓所だけを住処とする「大巫女の館」の住人となったのだ。

この聖地には、兄弟神の神殿、神王の神殿、最古の玉座の神殿があり、玉座の神殿の裏手の丘の頂上に立つ9本の石柱が「アチュアンの墓」である。これは人類のはじめ、アースシーが創造されたときに、光なき暗闇のなかで打ち込まれたといわれ、あらゆる人間社会が生まれる前の支配者である「名なき者たちの墓とされる。大巫女以外の人間は、どんなに身分の高い者でもこの墓所に足を踏み入れることは許されない。アルハはこうして東方の聖なる地における、西方のアースシー世界、すなわちカルガド帝国から見た、異人種世界と対立する価値観を体現した、不滅の最古の力につながる存在なのだ。

まず、少女テナーが「食べられる」ことでアルハとなる儀式的場面を見てみよう。彼女が新たな存在となるための儀礼として必須となる、象徴的なカニバリズムが描かれている。

The child got up and descended the four stairs laboriously. When she stood at the bottom, the two tall priestesses put on a black robe and hood and mantle, and turned her around again to face the steps, the dark stain, the throne.

“O let the Nameless Ones behold the girl given to them, who is verily the one born ever nameless. Let them accept her life and the years of her life until her death, which is also theirs. Let them find her acceptable. Let her be eaten!”

Other voices, shrill and harsh as trumpets, replied: “She is eaten! She is eaten!”

(*The Tombs of Atuan*, New York: Aladdin Paperbacks, 2001, pp. 3-4)

その子は立ち上がると、4つの段を苦勞して降りた。降りきると、ふたりの背の高い巫女が少女に黒い服と黒い頭巾と黒いマントをはおらせ、ふたたび石段と黒い染みと玉座のほうに

向き直らせた。

「おお、名なき者たちをして彼らに捧げられしこの生娘を眺めよ。この娘はまさに名なくしてこの世に生まれたる者。この者の命とその生ある年月を死の日まで、その所有者たる名なき者たちが受け入れられんことを。どうかこの者がそれにふさわしからんことを。この娘が食られんことを！」

トランペットのように高く鋭い、ほか巫女たちの声が、応えて言った、「娘は食われたり！ 娘は食われたり！」

(日本語訳は拙訳。以下同様)

ここで少女は「名前のない」存在に「食べられる」ことで「アルハ」となるが、歴代の大巫女たちも皆「アルハ」なので、これは名前ではなく「名なき者たち」に食われた者の印に過ぎない。つまり名前のない存在に食べられることによる社会的アイデンティティの喪失が、一方的なカニバリズムの過程として描かれているということだ。『アチュアンの墓』におけるカニバリズムの重要性は、このような一方的な関係が、危機と信頼という契機をとおして、相互性へと変容していくことにあると思われるのだが、その点は結論を急がず、物語の筋を追っていくことにしよう。

3. 暗闇と過去の記憶

アルハの権威は、大巫女の生まれ変わり神話に支えられている。つまり、ひとりのアルハが死んでも、この「食われし者」は他の少女の形象をまとって生まれ変わり、そうして永遠に大巫女は「名なき者たち」に仕えていく。だからその伝説を継承し、新しい大巫女を教育する役目の巫女たちは、アルハのことを先代の、そのまた先代の、というように続いてきたアルハの連続のなかで捉え、尊宗している。このような不滅の霊性の継承がアチュアンの信仰を支える根幹なのだ。次に引用するのは、アルハがそのような太古から続く歴史の不思議を想う一節である。

It still made her feel strange when Thar and Kossil spoke to her of things she had seen or said before she died. She knew that indeed she had died, and had been reborn in a new body at the hour of her old body's death: not only once, fifteen years ago, but fifty years ago, and before that, and before that, back down the years and hundreds of years, generation before generation, to the very beginning of years when the Labyrinth was dug, and the Stones were raised, and the First Priestess of the Nameless Ones lived in this Place and danced before the Empty Throne. They were all one, all those lives and

hers. She was the First Priestess. All human beings were forever reborn, but only she, Arha, was reborn forever as herself. A hundred times she had learned the ways and turnings of the Labyrinth and had come to the hidden room at last.

Sometimes she thought she remembered. The dark places under the hill were so familiar to her, as if they were not only her domain, but her home. When she breathed in the drug-fumes to dance at dark of the moon, her head grew light and her body was no longer hers; then she danced across the centuries, barefoot in black robes, and knew that the dance had never ceased. Yet it was always strange when Thar said, "You told me before you died ...". (*The Tombs of Atuan*, pp. 55-56)

自分が死ぬ前に見たり言ったりしたことをサーヤコシルが口にすると、アルハはいまだに不思議な気がするのだった。たしかに自分が死んで、自分の古い肉体の死の時間に新しい肉体に生まれかわった、ということはわかっている。15年前に一度だけではなく、50年前も、その前も、もっと前も、何年も何百年も昔から、世代から世代を超え、迷宮が掘られ、石柱が立てられ、名もなき者たちの最初の大巫女がこの場所に住み、空の玉座の前で踊ってからずっと。彼女たちはみなひとつ、すべての生が自分のもの。私は大巫女なのだから。すべての人間は永遠に生まれ変わるが、自分、アルハだけが永久に自分自身に生まれ変わる。百回も彼女は迷宮の道順と曲がり角を教えられ、ついに隠された部屋にたどり着いてきたのだ。

ときどきアルハはああ覚えている、と思うことがあった。丘の下の暗い場所はとても馴染みがあったし、自分の領地であるだけでなく我が家のように思われた。月の出ない晩に薬草の煙を吸い込んで踊ると、頭が軽くなり自分のからだは自分のものでないような気がする。そうすると自分が裸足で黒い服を着て何百年も踊り続けてきて、この踊りはけっして止んでなかったと知るのだ。それでもいつも不思議な気持ちになる、サーから「あなたさまはお亡くなりになる前に、こう言われました…」と言われると。

アルハとされたテナーは人間としての半生の記憶を失ったのだが、その代わりに「食べられた」ことで彼女に与えられたのは、連綿と続く過去のアルハたちの不滅の記憶である。つまりテナーは名なき者たちに食べられることによって、彼女に先行した数知れないアルハたちを逆に食べて、彼女たちの同一無比の強固なアイデンティティを獲得するに至ったのだ。しかし、アイデンティティとはそのような純粋で単線的な系譜によって与えられるものではなく、交雑と社交性によって築かれるものではないだろうか？ そしてそのような相対的な他者との出会いを、エレス・アクベの腕輪の半分を盗むために洞窟に侵入した魔術師がもたらすことになる。その魔術師、すなわちゲドとアルハとの出会いを次に見ていこう。

4. 言葉の魔法

何度も反復するうちに道順を覚えたアルハは、ある日、大迷宮へと足を踏み入れる。大迷宮のもっとも奥まった場所には宝庫があり、そこには最大の秘宝であるエレス・アクベの腕環の半分が収められている。はるかな昔、西方の島から靈魂の不滅を信じない魔法使いであるエレス・アクベが、カルガドの島々を平定しようとやってきたが、双子の兄弟神の神官であったインタシンとの戦いに敗れ、そのお守りであった腕環を二つに割られた。その半分が墓所の宝庫に隠匿され、もう半分はエレス・アクベが自分の側で戦った小国の王に手渡し行方不明になってしまったのだが、実はこれが『アースシー物語』の第一巻でゲドが、影との戦いのさなか、東海の孤島で出会った老婆から贈られた腕環の半分である。

アルハが記憶している迷路の道筋は耳で聞き手で確認するほかに、その身体感覚が先代のアルハから次のアルハへと伝えられている。このような記憶の伝授は、西方の群島の魔法世界における文字を介した知の継承と対照的と言える。一方にアルハの身体だけに独占された知があり、他方に言葉によって媒介された能力の展開があるのだ。次に引用する場面では、こうして聞かされた魔法の話に、アルハがしだいにひきつけられていくさまが描かれている。魔法使いを嘘つきの不信心者として軽蔑するコシルよりも、言葉による魔法の威力を認めているサーの語り口に、アルハがより魅かれているさまに、彼女がいずれ出会う魔術師との、その言葉の力との遭遇が予知されているかのようなのである。

... Kossil said in her cold voice. "They have no gods. They work magic, and think they are gods themselves. But they are not. And when they die, they are not reborn. They become dust and bone, and their ghosts whine on the wind a little while till the wind blows them away. They do not have immortal souls."

"But what is this magic they work?" Arha asked, enthralled. She did not remember having said once that she would have turned away and refused to look at the ships from the Inner Lands. "How do they do it? What does it do?" ...

"Words," said Thar. "So I was told by one who once had watched a great sorcerer of the Inner Lands, a Mage as they are called. They had taken him prisoner, raiding to the West. He showed them a stick of dry wood, and spoke a word to it. And lo! it blossomed. And he spoke another word, and lo! it bore red apples. And he spoke one word more, and stick, blossoms, apples, and all vanished, and with them the sorcerer. With one word he had gone as a rainbow goes, like a wink, without a trace; and they never found him on that isle. Was that mere jugglery?"

(*The Tombs of Atuan*, pp. 60-61)

コシルは冷たく言った、「やつらには神がありません。魔法をあやつり、自分たちを神と思っている。でもとんでもない。死んでも生まれ変わることがないのですから。塵と骨になって、亡霊がしばらく風に泣きますが、やがて風に吹かれて消えてしまう。やつらには不滅の靈魂などないのです。」

「でもその魔法とはどんなものなの？」アルハは夢中になって聞いた。かつて内海からの船など見向きもしないと自分で言ったことなど忘れてしまったかのように。「どうやるの？ どんなことをするの？」……

「言葉なのです」とサーは言う。「そのようにかつて内海のまじない師を見た人から聞きました。大魔法使いと呼ばれるそうですが。西国に攻め入って捕虜にしたんです。男は乾いた棒切れを見せて、ひとこと言うと、たちまち花が咲き、もうひとことで赤いリンゴが実り、もうひと言いうと、棒も花もりんごも消えて、そのまじない師もドロ。たったひと言で虹が消えるように、瞬きするあいだに跡形もなく。鳥じゅう探しても二度と見つからなかったそうです。これがただの手品でしょうか？」

このような言葉の魔法にアルハはしだいに魅かれていくが、言葉はさらにアルハが封印していた視覚をももたらす。言葉の魔法をあやつる魔術師との出会いが、彼女の視覚を覚醒させるのである。

5. 視覚による覚醒

ある日、アルハは迷宮に行こうとして、明かりが禁じられている地下の墓所で、光を目にする。一人の男が明かりの点る杖を持って何かを探していたのだ。今まで見たことがなかった鍾乳洞の風景は恐るべき美しさに満ちていたが、闇に慣れたアルハはそれを見せた男に怒りを覚え「出て行け」と叫ぶと、男は明かりを消して逃げ去る。アルハは迷宮から抜け出す唯一の出口である鉄の扉を閉め、男を闇の世界に幽閉する。

アルハは男を壁画の間で鎖に繋がせ、そこで水とパンをやり生かしておくことにする。ここで繰り返される食事の授与が、二人の間の信頼関係の発展につながっていく。こうして男に対する好奇心と恐れと支配欲望に揺れるアルハと男との間に、不可思議なつながりが育っていく。アルハにとっては、この闇を光で照らした男は、盗人の魔法使いである以上に、新たな世界に自分の目を開いてくれたからだ。次の引用は、男が掲げる魔法の杖の明かりによって、アルハがはじめて見た墓所の洞窟の情景である。彼女の目がはじめて捉えた、光に犯され闇が追い払われた名なき者たちの壮麗な場所の情景だけでなく、アルハがこれまで知ら

なかった自分自身の内面さえも映しだされているかのようにではないか。

She went on. This was strange beyond thought, beyond fear, this faint blooming of light where no light had ever been, in the inmost grave of darkness. She went noiseless on bare feet, black-clothed. At the last turn of the corridor she halted; then very slowly took the last step, and looked, and saw.

—Saw what she had never seen, not though she had lived a hundred lives: the great vaulted cavern beneath the Tombstones, not hollowed by man's hand but by the powers of the Earth. It was jeweled with crystals and ornamented with pinnacles and filigrees of white limestone where the waters under earth had worked, eons since: immense, with glittering roof and walls, sparkling, delicate, intricate, a palace of diamonds, a house of amethyst and crystal, from which the ancient darkness had been driven out by glory

The light burned at the end of a staff of wood, smokeless, unconsuming. The staff was held by a human hand. Arha saw the face beside the light; the dark face: the face of a man. (*The Tombs of Atuan*, pp. 69-70)

アルハはさらに歩をすすめた。考えも及ばぬほど不思議で、こわさも感じなかった、これまでどんな明かりも入ったことのない闇の領する最奥の墓に、このかすかな明かりが点っているとは。黒い衣を着て裸足の彼女は音も立てずにすすんだ。地下道の最後の曲がり角で彼女は立ち止まり、それからとてもゆっくりと最後の一步を踏み出し、そして顔をあげ、見た。

彼女が見たのは、これまで一度たりとも見たことがないもの、百の命を生きてきたアルハでさえも。墓石の下に広がる巨大な洞窟、人が切り開いたのではなく、大地の力が空けた場所。そこには数々の水晶が輝き、白い石灰岩は無限の年月にわたる地下水の働きで、尖塔のようにも金銀の線細工にもみがきあげられていた。膨大で、光り輝く天井と壁、明るく繊細で、複雑なダイヤモンドの宮殿、アメジストと水晶の家、光輝によって古来の暗闇が追い払われた場所。……

杖の先で煙も出さず、何かを燃やすこともなく灯っている明かり。杖を握っている人間の手。アルハは光のわきの顔を見た。黒い顔。男の顔だ。

つまり、名なき闇の世界の支配者たちがアルハに封じてきたのは、視覚への欲望なのだ。視覚とは、見られるというリスクを冒すことで見るという可能性を開く、信頼への賭けにほかならない。この“saw”という動詞に支配された文章が、最後にいたる男の顔。その中心にあるのは他でもなく、アルハ自身を見つめることのできる目であり、アルハに語りかける可能性のある口なのである。

ここでヴェヴェイロス・カストロが引用するフランク・レストランガンの一文を参照しても無駄ではないだろう。レストランガンはモンテーニュによるトゥピナンバ人の食人儀礼を評した文章について、次のように述べている。

これから食べられる捕虜の肉は、いかなる意味でも食物ではない。それは記号なのだ……食人の行為は、並ならぬ復讐を表象している……食人者の実践を通して言説の永続性を見出そうとするこの努力……大虐殺の帰結について述べ続けることなく、モンテーニュはつねに、名誉への挑戦、侮辱のやり取り、捕虜が死の前に創作する「戦士の歌」へと立ち帰る。このために結局、食人者の口には歯があることが忘れ去られてしまう。その口は、物をむさぼり食う代わりに、言葉を発するのだ。

(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 前掲書、97頁)

この美しい考察と響きあうように、ル＝グウィンには、物語としてはだいぶ後のほうになるが、なぜゲドがエレス・アクベの腕輪の失われた半分を求めてカルガドにやってきたかを、テナーを聞き手として、ゲドに次のように語らせている。言葉による意思の伝達がここでも重視されていることに注意したい。

“When I came back to the Inmost Isles, I went at last to Havnor. I was born on Gont, which lies not far west of your Kargish lands, and I had wandered a good deal since, but I had never been to Havnor. It was time to go there. I saw the white towers, and spoke with the great men, the merchants and the princes and the lords of the ancient domains. I told them what I had. I told them that if they liked, I would go seek the rest of the ring in the Tombs of Atuan, in order to find the Lost Rune, the key to peace. For we need peace sorely in the world. They were full of praise; and one of them even gave me money to provision my boat. So I learned your tongue, and came to Atuan.” (*The Tombs of Atuan*, p. 136)

「内海の島々に帰りついてから、やっとハヴナーに行くことができたんだ。僕はゴントの生まれで、ゴントは君の故郷であるカーギッシュから西にそれほど遠くない。生まれてから色んなところをまわったけど、ハヴナーには行ったことがなかった。そこに行くべきときが来たんだね。その白い塔の連なりを見て、様々な人たちと話をした、お偉いさんや商人たち、皇族や古くからの豪族の人たちとか。その人たちに僕が持っていた腕輪の話をしたんだ。それでもしよければ残りの半분을アチュアンの墓所に探しに行ってもいいって、平和の鍵である失われた魔法文字を見つけるためにね。なぜなら今の世界には平和が必要だから。話を聞

いた人はいたく感動してくれて、ひとりの人は船を用意するお金まで出してくれた。だから僕は君の言葉を習って、アチュアンにやってきたんだ。」

ここでも“saw”と“spoke”と“told”という視覚と会話を表す単語の連結によって、対話者であるテナーを通して私たちへと物語が受け渡され、それを支えるのが、「舌」という「言葉」であることが明らかにされている。ゲドは他者の「舌」を味わうことによって、テナーとの交通を可能とし、口とは、食べ、交わり、殺す、という人間的真理を明らかにするのである。次にそうした言葉によって、ゲドとアルハが互いに近接していく場面を見ていこう。

6. 物語によるアイデンティティの再獲得

こうして男が迷宮にエレス・アクベの腕環を求めて侵入してきたことで、『アースシー物語』の根幹にある二つの価値観の対立が一気に表面化するのだが、その対立は、男をいつでも残酷な死に追いやれると自らの力を確信するアルハの信念とは裏腹に、しだいに対話と融和へと導かれていく。むしろ、アルハの自らの闇の領域を守り、それゆえに侵犯者である男を恐れ憎む気持ちの強さこそが、新しい世界に直面した驚きと憧れ、そして無力なひとりの人間に対する憐みと敬意を生んでいくのである。

男は龍と対話できる龍王というだけでなく、かつて名もなき者たち、大地の恐怖と戦って傷を負ったと述べる。自分がすべてを知っていたはずの名もなき大地の力の名前さえ知っているという男に、激しい怒りを感じたアルハは、彼の無力さを罵るが、彼はそれにも静かに同意するだけである。以下の引用では、アルハが男を蔑むが、自らの力を誇示する彼女の口調の裏に内心の動揺が見える場面だ。

“No,” he said rather reluctantly, “I am a dragonlord. But the scars were before that. I told you that I had met with the Dark Powers before, in other places of the earth. This on my face is the mark of one the kinship of the Nameless Ones. But no longer nameless, for I learned his name, in the end.”

“What do you mean? What name?”

“I cannot tell you that,” he said, and smiled, though his face was grave.

“That’s nonsense, fool’s babble, sacrilege. They are the Nameless Ones! You don’t know what you’re talking about—”

“I know even better than you, Priestess,” he said, his voice deepening. “Look again!” He turned his head so she must see the four terrible marks across his cheek.

“I don’t believe you,” she said, and her voice shook.

“Priestess,” he said gently, “you are not very old; you can’t have served the Dark Ones very long.”

“But I have. Very long! I am the First Priestess, the Reborn. I have served my masters for a thousand years and a thousand years before that. I am their servant and their voice and their hands”

(*The Tombs of Atuan*, p. 98)

「いや、彼はややためらいながら言った、「いまは龍の者だけれど。でもこの傷はもっと前のものなんだ。闇の力を以前会ったことがあると言ったけれど、それは地球の違う場所でのこと。私の顔のこれは名もなき者たちとのつながりのしるしなんだ。でももう名無しじゃない、その名が最後にはわかったから。」

「なんですって？　なんて名前なの？」

「それは言えない」、彼は言って、微笑んだ、その表情は暗かったが。

「そんなのナンセンスだわ、馬鹿のたわごと、冒瀆よ。名もなき者たちなのよ。いったい何を言っているのか分かっているの？」

「あなたよりもよく知っていますよ、巫女さん」と彼は言う、その声は深みを増した。「もういちど見てごらん！」顔を突きだすと、頬についた4つのひどい傷を彼女に見せた。

「そんなの信じられないわ」と彼女は言ったが、その声は震えていた。

「巫女さん」、彼はやさしく言った、「まだ若いんだ、君は。闇の主たちにそんなに長く仕えていられたはずはない。」

「でもそうなの。とても長くよ！　大巫女なのですから、生まれ変わりの。主人たちに千年も、そのまた千年も前も仕えていたのよ。私はその召使にして、その声、その手なのですから。……」

このような名なき神々に食べられたアルハと、他者の本当の名前に通曉した男との対話の意味をカニバリズムの文脈で考えるとき、ヴィヴェイロス・デ・カストロが引用する多くのヨーロッパ人宣教師たちの「証言」が参考になる。たとえばジャン・ド・レリーは、トゥピナンバの食人儀礼における対話風景を次のように描く。

「お前は、われわれにとって敵である……民族の者ではないか？　お前も、われわれの親族と友を殺し、食べてきたのではないか？」——彼は、これまでになく自信ありげに応えた。「パ・チェ・タンタン、アイオウカ・アトウパヴェ。そうとも、俺はとても強く、本当に何人もの者たちを打ち倒し、食べてきた……ああ、嘘ではないぞ。ああ、お前たちの親族を襲って捕らえるほどに、俺は勇敢だったのだ。俺はそやつらを幾度も幾度も食べてきたのだ」。

彼を処刑する者は付け加えた。「お前は今やわれわれの手の内にあり、間もなく俺によって殺されるのだ。そして煙でいぶされ、ここにいるわれわれ皆によって食べられるのだ。」それに対し、次のような返事が返ってきた。「ああそうか、それなら俺の親族たちも仇を討ってくれるだろう」。

(ヴィヴェイロス・デ・カストロ、前掲書、91-92)

いままさに食べられようとしている捕虜は、食べようとしている者たちの親族を「幾度も幾度も食べてきた」のだから、ここにあるのは、私は私でありながら他者の血肉でもできている、という自己と他者との究極的な交換関係ではなかろうか。そして、このカニバリズムを焦点とする連鎖プロセスが止まらないことが、トゥピナンバ社会の共同体メカニズムを支えているのである。

ここではポストコロニアルなカニバリズム言説の見直しにおける（最初で概説した時代区分の第三期にあたる）要であった、はたして食人慣習は実在したのか否か、ということは問題とはならない。重要なことは、人が人を食べたか食べなかったかということではなく、人を食べるという営みがどのような社交性において行われており、それが自己と他者のどんな関係を再創造するか、という射程だからだ。そしてその実在の真正さを担保するのが食人儀礼、つまり歌の交換であり、武勇伝の応酬であり、身体の誇示であり、親族の強調といった、物語る自己と聞き取る他者との絆を支える人間性の相互承認なのである。

このようなダイアロジズムによる交換と対話論理から見ると、カルガドにおける歴代のアルハたちは「名もなき神々」によって食べられることで、先代の同じアルハたちを食べてきたのだから、そこには閉鎖的な共同体における自己の再生産はあっても他者との交雑はない。そのような閉鎖的な円環のなかからアルハを引き出すことになるのが、外部の魔法世界からエレス・アクベの腕輪の半分を求めてやってきた魔術師ゲドとの対話である。語り手と聞き手との関係が、これまで地理的文化的歴史的ジェンダー的に隔てられていた、食べられて名前を失った「アルハ」と、他者の名前を知ることで大魔術師として君臨する「龍王」との間で成立することによって、物語そのものというよりも物語る行為によって、自他の新たなアイデンティティが構築されるのであって、そのさいにカニバリズムが焦点となるのである。

ここで、かの有名な『千と千尋の神隠し』の最後のほうの場面、カオナシの食人欲望を契機として、千の物語行為によるハクの本当の名前の回復というクライマックスを思い出してもいいだろう。いずれにしろ、対話から身体へと、表象のレベルがアルハとゲドとの間で深まっていく、そのあたりに物語を進めよう。

7. 境界線上のアリア——モノと表象

アルハは周りの目をごまかして自分の食事さえも男に届けるようになる。男は感謝しながら、問われるままに多島海について多くの話をして聞かせる。たとえばハヴナーという内海の大きく美しい島のこと、その首都の大理石でできた塔や、いちばん高い塔の上にすえられたエレス・アクベの剣のこと。あるいは、龍がどんな動物で、その言葉はこの世の最古の言葉であり、それで龍と対話できる者は龍の者と呼ばれること。

そして、アルハに自分が魔法使いであることを証明するために何かしてみろと言われた男は、彼女に輝く美しい絹のドレスを着せて見せる。それはもちろん魔法による幻影にすぎないのだが、アルハは驚きのあまり狼狽する。魔法は単なる表象、つまり目くらましに過ぎないとは言え、深い真実にいたる道でもあって、危険に賭けることで信頼へと至る道筋なのだ。私たちの別様の姿は、自分の目で見ることはできない。それは他者のまなざしで見ることによって、初めて自分にも明らかになるものだ。これまで黒服しか着なかったアルハが、魔法の力ではじめて明るい愛らしい服を身に着けた瞬間を見てみよう。

“Show me something you think worth seeing. Anything!”

He bent his head and looked at his hands awhile. Nothing happened. The tallow candle in her lantern burned dim and steady. The black picture on the walls, the bird-winged, flightless figures with eyes painted dull red and white, loomed over him and over her. There was no sound. She sighed, disappointed and somehow grieved. He was weak; he talked great things, but did nothing. He was nothing but a great liar, and not even a good thief. “Well,” she said at last, and gathered her skirts together to rise. The wool rustled strangely as she moved. She looked down at herself, and stood up in startlement.

The heavy black she had worn for years was gone; her dress was of turquoise-colored silk, bright and soft as the evening sky. It belled out full from her hips, and all the skirt was embroidered with thin silver threads and seed pearls and tiny crumbs of crystal, so that it glittered softly, like rain in April.

She looked at the magician, speechless. “Do you like it?” “Where—”

“It’s like a gown I saw a princess wear once, at the Feast of Sunreturn in the New Palace in Havnor,” he said, looking at it with satisfaction. “You told me to show you something worth seeing. I show you yourself.”

“Make it—make it go away.” (*The Tombs of Atuan*, pp. 106–107)

「なにか見る価値のあるものを見せて。何でもいいから！」

彼は頭をたれて、両手をしばらく見つめていた。何も起こらない。ランタンのろうそくがほの明るく静かに燃えている。壁の黒ずんだ絵のなかの、鈍い赤と白の眼で鳥の羽を持つ飛べない像が、ふたりを見下ろす。何の音もしない。アルハはため息をつき、失望して少し悲しかった。やはり力がないのだ、色々と言いはしても何もできない。よくできた嘘つきだけれど、たいした盗みもできない。「だめね」、彼女はついに言って、立ち上がろうとスカートをたぐりよせた。動こうとすると毛織りの布が見慣れぬ音を立てた。自分を見下ろした彼女は、驚きで立ちすくんだ。

長年着ていた重く黒い服は消え、彼女のドレスはトルコブルーの絹で、夕方の空のように明るく柔らかだった。お尻のところで大きく膨らみ、スカートには細い銀の糸や小さな真珠や水晶がちりばめられ、まるで4月の雨のようにやさしく光り輝いていた。

アルハは言葉を失い、魔法使いの顔をながめた。「気に入ってくれた?」「どこで—」「ハヴナーの新宮殿で冬至の宴のとき、王女さんの一人が着ていたのに似せてある。」彼は言って、満足そうに眺めた。「なんか見る価値のあるものを見せるようにと言ったろう、だから君自身を見せてあげたんだ。」「消して、早くどっかにやって。」

カニバリズムと魔術の両側面で、表象や幻影の意義を考えようとするとき、この場面はとても興味深い。初めて黒い服以外の服を着た自分を見たアルハは、激しく動揺する。それを見た魔術師は、「服をくれた御礼のつもりだったのだけれど、嫌ならすぐに消してあげる、幻影に過ぎないのだから」と言って、指も動かさず一言も発せずに服を消してしまう。この後にすぐ続く場面も重要で、魔術師はアルハの言葉の途中で天井の覗き穴を指差す。アルハの言動を疑っている巫女のコシルが、そこからアルハたちの会話をスパイしていたことに魔術師は気がついていたので。その沈黙の警告に気がついたアルハは、殊更にはっきりと魔術師に向かって言う——「おまえの魔法は子供だましに過ぎない。トリックと嘘ばかり。もう見飽きた。名もなき者たちに食べられるがよい。わたしはもうここに来ることはないから」。アルハはこの言葉をコシルに聞かせようとして言うのだが、実はこの彼女の本心とは裏腹の発言には、マジックとカニバリズムとの緊張関係も表されている。魔法が単なる子供だましに過ぎなければ価値がないので、神々による食人の犠牲にしかまわらない。しかしすでにアルハは魔術がもたらす幻影が子供だましどころか、自分の知らなかった世界だけでなく、自分本来のアイデンティティを回復する契機になるかもしれないことに気づき始めている。だから彼女はきれいな服を着せられた自分を見て狼狽し、衝撃を受けたのである。

このような魔術と幻影ないしは記号表象との関係を考えると、参考になる場面がこの小説の最後のほうにある。すでにゲドとテナーがカルガドからの脱出に成功し、西の山岳地帯を旅して野宿しているときのことだが、食料が乏しくなってきた、テナーがゲドに魔法で食

料を出せないの、と聞く場面である。引用する。

“Can you find food for us?” she asked, rather vaguely and timidly.

“Hunting takes time, and weapons.”

“I meant, with, you know, spells.”

“I can call a rabbit,” he said, poking the fire with a twisted stick of juniper. “The rabbits are coming out of their holes all around us, now. Evening’s their time. I could call one by name, and he’d come. But would you catch and skin and broil a rabbit that you’d called to you thus? Perhaps if you were starving. But it would be a breaking of trust, I think.”

“Yes. I thought, perhaps you could just ...”

“Summon up a supper,” he said. “Oh, I could. On golden plates, if you like. But that’s illusion, and when you eat illusion you end up hungrier than before. It’s about as nourishing as eating your own words.” She saw his white teeth flash a moment in the firelight.

(*The Tombs of Atuan*, pp. 156-157)

「食べ物は見つけられないの」と彼女は聞いた、やや曖昧に、恥ずかしそうに。

「狩りは時間がかかるし、武器もいる。」

「私が言っているのは、その、呪文で。」

「ウサギは呼べるけど」、と彼はネズの木の間がった棒で火をおこしながら言った。「そうすれば穴からたくさんウサギが出てくると思うよ。夕方が活動時間だからね。名前を呼べば、一匹出てくるだろう。でもそうやって呼び出したウサギをつかまえて、皮を剥いで煮てしまうかい。まあたぶん飢えていたら仕方ないだろうね。でもそれは信頼を裏切ることになると思う。」

「そうね。私が思ったのは、たぶんあなたなら…」

「夕食をつくりだす」、「うん、それはできるよ。金色の皿に載せてね、よければ。でもそれは幻影だよ、そういう幻を食べてしまうと、前よりもますますお腹がすいてしまうんだ。自分の言葉を食べて栄養になるなら別だけど。」彼の白い歯が焚火の光で一瞬きらめいたのを彼女は見た。

まるで傑出した映画監督のように、焚き火の明かりでテナーの目に一瞬映ったゲドの白い歯の輝きを描写するル＝グウィンの詩人としての才能は、同時に、高貴で勇敢で雄弁なカニバルたちの口の中の、肉を噛み砕く歯と言葉を語る舌との共存を見逃さない人類学者の血筋を感じさせないであろうか？ 魔術は、一方で本当の名前を呼ぶことで相手を支配することの

出来る能力でありながら、他方では単に幻影を見せるにすぎず、それを食べても言葉を食べるのと同じで、身体には何の栄養にもならない。しかしこのゲドの説明は、トゥピナンバの食人儀礼における表象の意義と同様の問いを喚起する。たしかに魔法による食事の幻影や、食人儀礼における処刑者と捕虜との会話は、記号による表象に過ぎないけれども、そこには他者に対する敬意や信頼にいたる道が確かに存在するからだ。魔術も食人も、お腹をいっぱいにしたり、体に栄養を補給することが目的なのではなく、他者との関係を構築し、自然界におけるモノ自体へと直接的にアクセスするための人間の方策なのである。

上の場面のすぐあとで、ゲドはテナーの頼みを聞いて、実際にウサギを呼び出す。もちろん食べるためではなく、生き物として賛嘆するために。その可憐な姿に感動したテナーは、自分にも出来るか、と聞く。その部分も引用しよう。

“Ah!” she said, letting out her breath. “That’s lovely.” Presently she asked, “Could I do that?”

“Well—”

“It is a secret,” she said at once, dignified again.

“The rabbit’s name is a secret. At least, one should not use it lightly, for no reason. But what is not a secret, but rather a gift, or a mystery, do you see, is the power of calling.”
(*The Tombs of Atuan*, p. 158)

「ああ」と彼女は言って息をのんだ。「かわいい。」すぐに聞く、「私にもできる？」

「そうだなあ…」

「秘密よね」、すぐに彼女は威厳をもって言った。

「ウサギの名前は秘密だね。少なくとも軽々しく、理由もなく使うものじゃない。でも秘密ではなくて、というより才能というか神秘的なのは、呼びかける力なんだ。」

ここでゲドが言う、他者の名を呼ぶというギフト、神秘というモチーフから、ル＝グウィン
の読者ならすぐに、ポスト魔法世界における言葉や歌の力を扱う『西の国の年代記』の最初
の巻である『ギフト』における、メマーの役割、彼女の動物に呼びかける才能を思い浮かべ
られることだろう。魔術もカニバリズムも、表象を通じて獲得される神秘的な力、あるいは
倫理的な信頼へといたる秘儀であること、その意味で他者と自己との間の「境界線上の美し
いアリア」なのだ。

さていよいよ小説は、アルハとゲドが信頼のきずなで結ばれて、カルガドから脱出するク
ライマックスへと至る。

8. 名前の回復、約束と信頼

ようやく名前という表象記号の重要性を再認して、食べることと信頼との関係に踏み込む準備ができた。まずアルハが自分の本当の名前、テナーを回復する場面から見よう。迷路のもっとも奥深くにある大宝庫に男を隠したアルハは、自分の食事を割いて、できるだけ水も食料も持ってくる約束をする。男はアルハがこれまで知らなかった表情を浮かべて、去っていく彼女に言う、「気をつけて、テナー」と。引用する。

“I'll bring food and water when I can. There won't be much. Water enough, but not much food for a while; I'm getting hungry, do you see? But enough to stay alive on. I may not be able to come back for a day or two days, perhaps even longer. I must get Kossil off the track. But I will come. I promise. Here's the flask. Hoard it. I can't come back soon. But I will come back.”

He raised his face to her. His expression was strange. “Take care, Tenar,” he said. (*The Tombs of Atuan*, p. 115)

食べ物や水はできるだけ持ってくるから。たくさんはないけど。水は十分あるけど、しばらくはたくさん食べ物を持ってくるのは無理。わたしもお腹がすいているから。でも生きるには十分。一日か二日戻ってこれないかもしれない、もしかしたらもう少し長く。コシルに気づかれないようしなくちゃいけないから。でも来るから。約束します。水はこれ。儉約してね、すぐには来れないから。でも必ず戻ってきます。」

男は顔をあげて彼女を見た。男の顔には今まで見たことのない表情が浮かんでいた。「気をつけて、テナー」と彼は言った。

ル＝グウィン作品ではいつもそうだが、何の変哲もなさそうな小さな場面、平易な単語の積み重ねからなる単純な会話文の行間に、感情の機微や、苦悩と歓喜のせめぎあい、人が生きてきた時間の重さが滲み出るのが。ここでも自分の乏しい食事を割いて、魔術師に水と食事を与え、彼を生かそうとするアルハの必死さが伝わってくる。まさにこれは、神々に一方的に食べられた少女が、自分の血肉を文字通り分け与えることで、この不思議な男との心の絆を作る、いわばカニバリズムと魔術との結婚に他ならない。必ず帰ってくるという女の「約束」が、男の信頼の証となる。そしてその印こそが、男が初めて彼女に呼びかける「テナー」という、本当の名前なのである。

すぐ後の場面で、大巫女の館に戻って床についたアルハは、夢のなかで母親が自分の名前

を呼ぶのを聞く。「テナー、テナー」と。そして目を覚ました彼女は、自分がテナーであること、自分の名前を取り戻した歓喜に身を震わせる。彼女が目覚めた後の類なく美しくもユーモアに富んだ場面を引用しよう。

“I am Tenar,” she said, not aloud, and she shook with cold, and terror, and exultation, there under the open, sun-washed sky. “I have my name back. I am Tenar!”

The golden fleck veered westward towards the mountains, out of sight. Sunrise gilded the eaves of the Small House. Sheep bells clanked, down in the folds. The smells of woodsmoke and buckwheat porridge from the kitchen chimneys drifted on the fine, fresh wind.

“I am so hungry How did he know? How did he know my name? ... Oh, I’ve got to eat, I am so hungry”

She pulled up her hood and ran off to breakfast.

(*The Tombs of Atuan*, pp. 117-118)

「私はテナーなんだ」と彼女は言った、声は出さずに、そして寒さと恐怖と歓喜に打ち震えた、太陽の輝く広い空の下で。「私は自分の名前を取り戻した。私はテナーなんだ！」

金色の点が西の方の山々に向かって飛んでいき、見えなくなった。上ってきた太陽が小宮殿のひさしを照らす。羊のベルが鳴って谷間を下って行った。台所の煙突から木が燃える煙やそば粉の粥の匂いが、綺麗でさわやかな風によって流れてきた。

「ああお腹がすいた…どうして分かったのだろう？ どうして私の名前を知ったのだろう？ …とにかく食べに行かなくちゃ、お腹がすいてしょうがない…」

彼女は頭巾をかぶって、朝食に走っていった。

名前という記号に象徴されたアイデンティティの回復と、自然やそこに生きる動物たち、家や煙突や野原、太陽や空や風や、音や匂いといった森羅万象の認識が、これほど簡潔に結びつく場面の描写は少ないだろう。魔術師にとって、人や動物や龍や、あらゆる存在の本当の名前を知ることが出来れば相手を滅ぼすこともできるし、相手と生涯かけがえのない友情を育むこともできる。だから本当の名前は簡単に明かしてはならない。こうしてまったくこれまで異人と思っていた男から、自分の名前呼びかけられることによって、アルハは幼少期に母から呼ばれた自分を思い出し、自分の本当の名前、誰にも食われていなかった自分自身を再発見するのだ。そしてあらためてテナーとして生まれ直した彼女は、自分の周りに存在するモノの存在を認知し、さらにお腹がすいたと言って、朝食に出かける。名前と食事、表象と自他のアイデンティティ、カニ

バリズムと魔術との、なんとも奇妙で、しかし卓越した複合ではないだろうか？

このようにして一方的に神々による食人の対象となることによってナルシズムの闇に囲まれていたアルハは、「私の名前はテナーなんだ」と、声にならない声によって他者と自己とをつなぐ表象記号を再獲得する。そのときこれまで一元性の頸木に囚われていた彼女の目に太陽や小宮殿が映り、耳に羊のベルが聞こえ、鼻に煙や粥の匂いが届き、肌に風が感じられる。このような「モノ」との新しい出会いが、多元的なアンチ・ナルシスの世界を開く。「お腹がすいた」というテナーの空腹の認識が自分の名前を知られたことの謎と結びつくことで、魔術師への信頼が芽生えるのだ。そのときカニバリズムはまったく新しい様相をもって、他者を食することによる自己再生の契機となるだろう。ナルシズムについて言えば、実はその閉域に捕われていたのは、アルハではなく、むしろ魔術師であるゲドのほうである。アルハは一方的な食人的儀礼によってナルシズムを捏造されていたに過ぎないのだから。むしろゲドのほうが、アルハとの対話、ダイアロジックな交流によって、魔術が実は他者を誑かす術ではなく、自己と他者のあいだに信頼を育てる双方向的な^{アート}芸能であることを彼女から学ぶのだから。

いよいよ魔術師はテナーに、エレス・アクベの腕環の由来を語って聞かせ、これをひとつにしてハヴナーに持ち帰ることが、平和な世界を呼び戻すために必要なことを説く。そしてそれを身に付けて持ち帰るのは、なによりもテナーでなくてはならない、と。彼女はテナーか、アルハか、どちらかを選ばなくてはならないのだ。一方的に闇の存在に食べられた者から、双方向的に他者を食べることで光ある世界の人間となること。それは力をあわせても困難な道行きだろうが、二人には今エレス・アクベの腕環がある。そしてもうひとつ、二人が頼れるもの、それこそが信頼である。そのしるしに魔術師は、自分の本当の名前ゲドを、ついにテナーに与える。ル＝グウィンの小説群には、このような一度読んだら絶対に忘れられない情景がたくさんあって、間違いなくこれもその一つだろう。引用する。

“They would not let us get out. Ever.”

“Perhaps not. Yet it’s worth trying. You have knowledge, and I have skill, and between us we have” He paused.

“We have the Ring of Erreth-Akbe.”

“Yes, that. But I thought also of another thing between us. Call it trust That is one of its names. It is a very great thing. Though each of us alone is weak, having that we are strong, stronger than the Powers of the Dark.” His eyes were clear and bright in his scarred face. “Listen, Tenar!” he said. “I came here a thief, an enemy, armed against you; and you showed me mercy, and trusted me. And I have trusted you from the first time I saw your face, for one moment in the cave beneath the Tombs, beautiful in darkness. You

have proved your trust in me. I have made no return. I will give you what I have to give. My true name is Ged. And this is yours to keep.” He had risen, and he held out to her a semicircle of pierced and carven silver. “Let the ring be joined,” he said.

(*The Tombs of Atuan*, pp. 139-40)

「逃がしてくれないわ。絶対に。」

「だめかもしれない。でも試す価値はある。君には知識が、私には術が、そして私たち二人の間には……。」男は口ごもった。

「エレス・アクベの腕環があるわ。」

「うん、そうだ。でももうひとつ別のものを考えていた。信頼、かな。それがひとつの名称だけど。とてもすばらしいものなんだ。ひとりひとりでは弱いけれど、信頼があれば強い、闇の力よりも強い。」男の目は傷のある顔のなかで澄んで輝いていた。「聞いてくれ、テナー！」彼は言った、「僕はここに盗みにあなたの敵としてやってきた。それでもあなたは慈悲を示して、信頼してくれた。それで僕は君の顔を見た最初のときから信頼したんだ、墓の下、洞窟の暗闇で一瞬だけ、美しい顔を見たときから。君は僕への信頼を証明してくれた。私は何のお返しもしていない。だから私は自分があげなくてはいけないものをあなたにあげよう。私の本当の名前はゲドだ。そしてこれはもうあなたのものだ。」彼は立ちあがり、穴が開き彫りの入った銀の環の半分を差し出した。「腕環を合わせよう」と彼は言った。

自分たちをどこまでも追って「貪り食うだろう」原初存在から逃れるために、テナーとゲドが頼りにできるモノ。それをゲドは文字通り“thing”と呼ぶ。腕環も本当の名前も、そして信頼も“thing”なのだ。本当の名前が交換され、腕環が一つに合わされ、信頼の絆が結ばれたとき、表象とモノとが終に一体化するのである。

テナーは最初、ゲドに自分たちのあいだにあるもの、と言われて、すぐに「エレス・アクベの腕環」を挙げるが、ゲドはそのほかにも「モノ」があると言って、その複数の名前の一つが「信頼」である、と言う。表象であるかぎり、物体を名付けようとすれば、それは複数の記号による命名に頼るほかない。しかしどんな名前と呼ばれようとも、今テナーとゲドのあいだにあるものは、「信頼」とでも言うておくほかない「思弁的実在」なのだ。「名前」という表象の交換から、「腕輪」というモノ自体の存在の贈与へ——ここには私たちが今日迎ってきたカニバリズムと魔術によってもたらされる自己と他者の関係の変容という主題が、危険の共有をとおした信頼の創造というかたちで表明されているのである。

かりにコロニアリズムが他者の血肉を一方的に消費することだとすれば、カニバリズムとは相手の血肉を引き継ぐという危険と覚悟を伴うだろう。そして『アースシー物語』から『西の国の年代記』へといたるル＝グウィン物語が、魔法の支配する世界から、信頼の支

配するポスト魔法世界への道筋をたどるものだとすれば、前者において最強の存在であったゲドは、後者においてカニバリズムを体験したテナーに道を譲るのだ。

こうしてようやく我々もトゥピナンバの人々が日常生活で示す礼節と、食人儀礼で示す敵への憎悪が、相反するものではなく、人間への信頼に基づくものだという、ヴィヴェイロス・デ・カストロの主張を、ル＝グウィンが描く倫理的な物語のなかで確認することができる。それは人間と人間以外のものを区別する西欧的ヒューマニズムの差別主義とは何の関係もなく、赤坂憲雄が参照する宮澤賢治や、私たちが日本国民として立ち返るべき日本国憲法前文のなかにも脈々と流れる、危険と信頼の詩学なのである。

＊

最後は石牟礼道子の引用で終わろう。彼女の「花の文」というエッセーには、胎児性水俣病患者であった坂本きよ子さんの母親トキノさんの言葉が次のように記されている――

きよ子は手も足もよじれてきて、手足が縄のようによじれて、わが身を縛っておりました。(中略) 私がちょっと留守をしとりましたら、縁側に転げ出て、縁から落ちて、地面に這うとりましたですよ。たまがって駆け寄りましたら、かなわん指で、桜の花びらば拾おうとしよりましたです。曲がった指で地面ににじりつけて、肘から血い出して。(中略) 桜の時期に、花びらば一枚、きよ子のかわりに、拾うてやってはくありませんでしょうか。花の供養に。

(石牟礼道子『花びら供養』平凡社、2017年、13-14頁)

石牟礼は、きよ子さんの母親の言葉を自らの文に託すことによって、危険を顧みずに桜の花びらを拾おうとした「きよ子のかわりに」、花を弔ったのだ。食べることも、書くことも、生きることも、実はこの「かわりに」何かするという、危うさと不安をはらんだ代理表象の営みにほかならない。実のところ、私たちは他者の人生を生きているのだから。カニバリズムも魔術も、実はこの一枚の花びらという「モノ自体」をかわりに拾って供養するような、危険な試みなのではないだろうか――忘却ではなく、記憶のために。欲望ではなく、理解のために。消費ではなく、信頼のために。